



かけ合わせで増やす文化遺産関係人口（〈特集〉地域 歴史遺産を取り巻く多様な取り組み：文化財保存活 用地域計画を足がかりにして）

萩原，康仁

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:31-46

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499184>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499184>



特集 地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組み—文化財保存活用地域計画を足がかりにして—

かけ合わせで増やす文化遺産関係人口

萩原 康仁

一 はじめに 担当者から関係者へ

本稿は筆者自身が、歴史文化遺産の保護と活用を担う「担当者」から、歴史文化遺産を目的達成の素材として使う「関係者」に立場を移しながら、歴史文化遺産の活用の道を探った成果を記す。

まず、事業展開時の著者の立ち位置を明確にするため、僭越ながら経歴を簡単に説明させていただく。

(一) 市史編集室時代

平成六年に文化財担当として加西市教育委員会に入庁し文化財行政（主に埋蔵文化財発掘調査）に関わる。平成一一年に、

市長部局となっていた市史編集室に異動となり事務局として、『加西市史』全二〇巻の編さんに携わる。平成二一年度に市史編さん事業が完了し、その後は郷土資料の調査、保存、活用に従事する。

この間に加西市と神戸大学が地域連携協力協定を締結し、担当としては人文学研究科と青野原俘虜収容所の調査研究および活用事業を連携して実施してきた。

(二) 生涯学習課時代

平成二七年度に機構改革により、教育委員会の生涯学習課へ業務ごと異動し、文化財と郷土資料の担当となる。時勢もあつたがこの業務の統合により、加西市の文化財行政の方向性が、指定文化財重点の施策から、未指定文化財も視野に入れた施策

まで広がっていくことになる。これによる関係する人たちも、文化財所有者や開発事業者だけでなく、地域住民や地域の活動団体等の割合が少しずつ増えていった。

平成二八年度に歴史文化基本構想策定に先立つ基礎調査を行い、翌二九年度に「加西市歴史文化基本構想」の策定に携わる。令和三〇年度には文化財保存活用地域計画の策定に向け、構想策定段階で調査課題となっていた、「加西の石の文化」の最終形態ともいべき「腰石積み堆肥舎」の調査を行い。令和元年度に「加西市文化財保存活用地域計画」を策定にこぎつけた。令和二年一二月に国の認定を受け、県内二例目（香美町と同時）の国認定計画となった。

構想から地域計画策定まで、短期に推進することができたのは、加西市史編さんに伴う悉皆調査の成果があったことと、比較的先行して地域計画策定に着手したことで、道は整備されていなかったが、寄り道する場所も無かったことが幸いしたと考えている。また、策定に当たっては、新たな項目として防犯・防災の項目を加え、市防災計画等にも文化財防災の記述を盛り込んでいった。

改めて計算すると、この七年間で指定・登録に至った文化財は、県指定四件、市指定八件、県登録一件を数えていた。内三件の市指定は地域計画策定に併せ、保存活用区域三地区それぞれのものである。

（三）文化・観光・スポーツ課時代

平成四年に市長部局のふるさと創造部文化・観光・スポーツ課へ芸術文化担当として異動。同じ文化でも、古い文化の保存と活用から、現在の文化の振興に切り替わり、市文化連盟など文化団体等の活動や芸術振興事業、市民会館管理事業のほか、播磨国風土記事業として加西能の開催、加西市こども狂言塾、風土記講座等に携わる。風土記事業では、文化事業・観光事業の角度から歴史文化遺産を活用（利用）する側として携わることになる。

（四）観光課時代

令和五年度一〇月の機構改革により、文化・観光・スポーツ課が、文化スポーツ課と観光課の二つに分かれて、観光課の担当になる。観光課では五百羅漢保存委員会の事務局が置かれていたため、わずか半年間ではあるが五百羅漢の事業に携わった。

（五）まちづくり課（現在）

令和六年四月の異動により、現在はまちづくり課に所属し、自治会や地域活動団体を携わっている。かつて歴史文化遺産の活用で知り合った地域の方と、現在の業務として再会することもある。

また、地域活動団体の中に歴史文化遺産を活用した事業を展開する団体もあるため、団体活動の支援という大きな枠組みで携わっている。

二 変化のある文化遺産の活用

活用のパターン、深化と開拓

歴史文化遺産の活用を、対象者の興味度合いとそこへの働きかけという観点からみていくと、大きく「1を2や3にする」発展・深化的要素と、「0を1にする」開拓的要素の二つに分類することができる。二つの要素に対しどの程度の比重を置くかが、事業の組み立てていく上での一つの指針となる。

(一) 1から2へ

歴史文化遺産の活用事業を計画する場合、概ね当該文化遺産単体または中軸に置きイベントや事業を展開していく。

そこには、「①多くの人にその価値を知って欲しい」に始まり、次に「②より詳しく知って欲しい」と思いがある。担当者がその歴史文化遺産の価値を深く理解していればいるほど、思いは強くなり②が前に出過ぎるきらいがある。

「1から2・3へ」の要素が高い事業は、ある意味「王道」で、担当者の歴史文化遺産に対する造詣や思いが反映しやすい（影

響を受けやすい）形態と言える。単体ないし同種の歴史文化遺産を素材とし、展示、見学など直接的なものから、講演、講座など回数を重ねることも可能で事業展開の方向付けが比較的内容で、かつ突き詰めると3・4・5、果ては学術的研究まで奥が深い。

当該歴史文化遺産に興味がある人、歴史が好きな人など「1」の層が参集者の多くを占めることになり、参集者の志向も知識の上積みにあるため、「2・3」へ展開する事業の方向性と合致している。開催日程や広報の手法に問題が無ければ、過去実績などから参集者の数もある程度読め、複数回の参加も見込むことができる。

さらに、事業を重ねることでお互いに顔馴染となり、名前を呼び合える関係が主催者と参集者との間にできる。また、「0」層へ開拓側からの引力が弱い場合も、彼らの個人的引力や集団の引力で「0」層の巻き込みも期待ができる。

こうした「2・3」への深化と併せ、主催者側と強い関係性を構築した参集者の中から、サポーター的人材が生まれることもあり、支援人材の確保も期待できる。また、蓄積した専門知識を有効に使えることで、担当者側もやりがいと効果を実感しやすいやり方といえる。

その反面、参集者が固定しやすく公募・公開ではあるものの、実態はクローズドサークルの様相を呈していくことがあ

り、「0」層はもとより、新規「1」層の加入にも障害となる場合もある。支援人材としての協働を期待するのであれば、早い段階でモチベーションとなる役目の付与と、ナビゲーターとしての意識付けを開始する必要がある。手近なところではボランティアガイドの養成になるだろうが、これはこれで職員のリソースが奪われてしまうので、初めは小規模に「先達協力者」として事業の協働がベターであろう。

(二) 0を1に

こうしたオーソドックスな手法では、都市部のように分母（人口）が大きな地域では、特定層の割合が低くても人数的には一定の数字を稼ぐことができるが、地方ではほぼ固定した集団を対象とした、当該集団の潜在的欲求に沿った活用事業と化し、マンネリ化や頭打ちを招きかねない。

加西市でも、参加していただくのはありがたいことではあるが、入門的講座と発展的講座で同じ顔ぶれとなるなど、その傾向が見えてきていた。担当としてはある一定の機微が掴めていることもあり、楽な面があつたことも否めないが。

そのためここ数年は、裾野を広げる新規開拓的な事業、全く興味がない人をこちら側に引き込めるような活用（興味0を興味1にする）に挑戦してきた。

イベント型ではないが、令和三年度から「加西市文化財保存

活用地域計画」の計画期間の開始に合わせ、「歴史文化を活かしたまちづくり活動補助事業（通称「歴史事業」）」を施行し、未指定文化財も含めた歴史文化遺産の活用を推進した。活用対象となる物件は村社や村堂や祠など、地域に密着した未指定文化財が多く、補助制度を導入することで、これまで自分たちの生活空間に「いつもある」「ただ有るだけの存在」を歴史文化遺産として認識するきっかけづくり（これも0を1にする策）にもなればと考えた。そのため修理系事業の実施に当たっては、地域住民へのお披露目や公開を義務付けることにした。

そして、0↓1の有効手段として採用したのが、歴史文化遺産と「何か」をかけ合わせて事業を展開するものである。歴史文化遺産同士をかけ合わせるパターン、全く違う物をかけ合わせるパターンの二通り事業を試みた。

以下、筆者が試みた「かけ合わせ事業」整理する。

三 かけ合わせ事業

(一) 青野原俘虜収容所開設一〇〇周年事業

著者は、担当時代から青野原俘虜収容所の活用に関わっている¹。神戸大学との積極的な連携もこの歴史文化遺産を通じて始まっている。

青野原俘虜収容所は、第一次世界戦時に設置された収容所の

一つで、大正四年（一九一五）に陸軍高岡廠舎（加東市・加西市）内に開設されている。収容された捕虜は、日本が青島要塞攻略で得たドイツおよびオーストリア＝ハンガリー兵である。青野原には約五〇〇人が収容され、うち半数がオーストリア＝ハンガリー兵である。日本が得た同国捕虜の約八割が収容されていたことが、青野原の最大の特徴であり、ハプスブルグ帝国の実情を反映した、他民族・多言語で構成された収容所となった。収容所閉鎖後は高岡廠舎施設として利用され、戦後は開拓団に払下げとなり収容所跡が入植村となり青野原町の母体となった。収容棟がそのまま入植者の住宅（後に切り分け戸建て住宅化）となったため、収容所区画が現在の集落区画として残り、現在でも条里遺構の如く、面的に視認できることも特徴の一つである。また、将校用風呂棟が兵庫県登録文化財（令和元年）になっている。こちらも現在確認されている中では、建築時の位置で現存する国内で唯一の収容所風呂棟である。

平成二十七年（二〇一五）が青野原俘虜収容所の開設一〇〇周年にあたることから、「青野原俘虜収容所開設百周年事業」として複数の事業を開催した。なお、前年（二六年度）が第一次世界大戦の開戦百年に当たることから、プレ事業として神戸大学と連携し資料展示や講演会など「1から2」の事業を開催している。

一〇〇周年事業は、

- 世界史視点の企画
- 青野原収容所の特徴である民族の多様性を表現
- 捕虜も利用した播州鉄道（現JR加古川線）沿線を活用
- 歴史好きでない人への歴史事業

の要素を掲げ事業を展開し、「0を1にする」も事業の要素に組み込んだ。

青野原俘虜収容所 × 駅Ⅱパネル展示「大門口駅と青野原俘虜収容所」

まず、小さい形になるが、JR加古川線青野ヶ原駅（小野市）の待合室で、資料展示（パネル展示）を行った。当駅は旧播州鉄道大門口駅にあたり、大正四年九月に姫路収容所から汽車で移動してきた捕虜たちが降り立った駅である。ローカル線特有の待ち時間を逆に利用し、展示を鑑賞する時間に当て込んだ。この駅の待合室は、地域の団体やこどもの展示が掲示されており、その一環で地域の隠れた情報として提示した。

青野原俘虜収容所の存在と共に、この駅で三〇〇人を超える欧州人が一度に降り立つなど、青野ヶ原駅史上初のことであり、おそらく今後も無いであろう歴史的事象であることを、日々駅を利用される人に知っていただくことをきっかけに、青野原俘

虜収容所の入口にできないかと考えた。無人施設での展示であつたため効果等は測れなかった。

青野原俘虜収容所×道Ⅱ青野原記念ウォーク

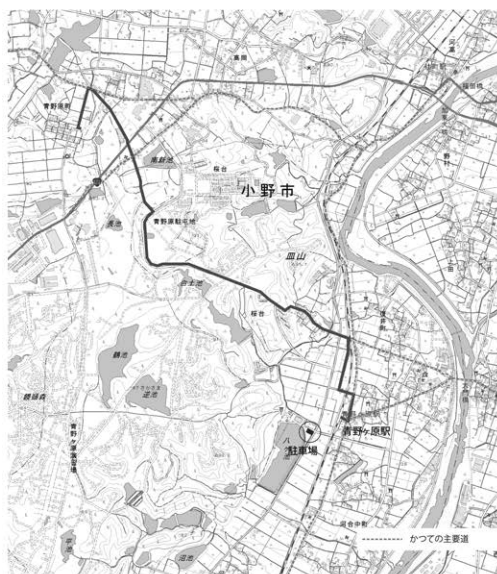
歴史文化遺産とウォーキングは親和性が高く、歴史文化遺産を巡るウォーキングは多数企画されている。参加数も期待できリピーターも多く、かけ合わせ事業の中では有効な手段の一つである。一方、その大半が歴史文化遺産である「点」を、ウォーキングという「線」で結ぶというもので、道程については歩くことや景観を楽しむという、ウォーキングに比重が置かれている。

捕虜が歩いた道ウォークは、前述の青野ヶ原駅（旧大門口駅）から青野原俘虜収容所までを歩く企画ではあるが、大正期の地形図を参考に捕虜が歩いたと想定される旧道を復元し、この道をトレースするコースを設定した（図1）。これにより「線（道）」の取扱いも歴史文化遺産となった。

J R 青野ヶ原駅をスタート地点に青野原俘虜収容所跡（青野原町）へ向かい、同町の公会堂を折り返し地点とした。公会堂前広場では地域住民による振る舞いや、開拓村の発展成果ともいえる産直野菜の販売が開かれた。

道中は、敢えてガイド付きウォーキング形式を採用した。往路では駅に降り立った捕虜がどのような気持ちで青野ヶ原の段丘

本日のウォーキングルート



俘虜が歩いたと考えられるルート



図1 旧道とウォーキングルート 当日資料より

を上り収容所に向かつていったのか、復路では故郷へ続く道で、捕虜たちの坂を下る足取りは軽かったのか重かったのか、敗戦した母国へ戻る者、独立を勝ち取った新国家へ戻る者、ガイドの誘導により、これらを考える呼び水とした。

また、青野ヶ原台地は、明治期に軍馬育成場として軍事利用が始まり、収容所が置かれた高岡廠舎、大門口駅近くに大門廠舎が置かれている。大正期には高岡廠舎内に俘虜収容所が設置され建造物と遺構が残り、第二次大戦中には戦車隊が設置され、大門廠舎の建造物が残存している。戦後は陸上自衛隊の駐屯地が置かれており、このルートを歩くことで、明治から現在の青野ヶ原台地の軍事・防衛利用の歴史も辿ることができる。

この企画のアプローチは、0層となるウォーキング愛好者には「ウォーキングイベント」として、1層の歴史愛好家には2となる「フィールドワーク」としてアプローチをしているが、最も大きな0↓1効果はこちら側（主催者側）にあった。イベントを地元青野原町と共同で開催としたことで、町内住民への認知が一気に広がった。

この一連の一〇〇周年事業を経て、平成二八年度に地元有志による「青野原俘虜収容所跡保存会」が設立された。その後、当該校区の地域活動団体である「富合地区ふるさと創造会議（ももこのーい）」の部会となり、文化庁の補助金を活用し、後述する青野原楽団の演奏会や研究者による講演会、資料展示会等

が毎年開催されている。本ウォーキングも、同団体が新たに開設した「青野原俘虜収容所跡語り部養成講座」に、フィールドワークとして組み込まれ、継続的に開催されている。

青野原俘虜収容所×サッカー×外国人Ⅱ 青野原俘虜収容所蹴球交流戦再現エキジビション

この事業は、収容所の捕虜が神戸大学の前身である姫路師範学校、県立小野高等学校の前身である小野中学校とサッカーの親善試合を行った史実の再現イベントとして開催した。

サッカーについては、捕虜に好まれたスポーツの一つで「ケルステン日記」にも対外試合の記述が残っている。捕虜テグの描いたスケッチに描かれていたゴールマウスらしき木組みと写真の分析により、収容所南の広場にコートが設けられていたことが判明している。

対象とした0層はサッカーのプレーを楽しむフットボーラーたちである。加西市国際交流協会（ねひめカレッジ）、県立小野高等学校（小野市）、神戸大学の協力を得て、市内外の外国人で編成した捕虜を模したチーム、小野高校のサッカー部からなる旧制小野中チーム、神戸大学の大学生のチームからなる姫路師範チーム、そして加西市の有志連合チームという四チームを編成し、七人制サッカーの大会を開催した。現地での開催は不可能であったため、同じ小学校区（富合小学校区）にある、

加西市多目的グラウンドを利用した。

事前の呼びかけと併せ、試合前のレクチャーで、百年前の加西の地で、外国人チームとの試合が開催されたこと。しかもそれが第一次世界大戦の捕虜で、青野原俘虜収容所に収容されていたこと。また、サッカーの対外試合ができる程に生活の自由が保障されていたこと等を伝えた。

ここに有志で関わってくれた人たちの一部とは、現在も交流があり、大会の話をすることもある。参加者の中には、外国のチームとサッカーをしたとか、その時に収容所や捕虜の話をしていたなど、0が0・3程度は残ったのではないかと期待している。

また、協力団体であった加西市国際交流協会が、事業を引き継ぐような形でコロナの中断期はあったが、外国人との交流事業として毎年「フットサルワールドカップinかさい」を開催している。

その他一〇〇百周年事業では、J R 粟生駅併設の小野市立あお陶遊館アルテ（小野市）でのピアマグ製作体験会、青野原町が管区となる加西市南部公民館と連携した「世界のとびら」（料理教室）でのドイツ料理体験等、子どもや女性の0層へのアプローチも試みている。また、かけ合わせではないが、映像研修と称し映画『バルトの楽園』の鑑賞会を開催し、この上映が前述した青野原俘虜収容所跡保存会の設立契機となった。

（二）歴史文化遺産 × 芸術

青野原俘虜収容所 × 音楽 II 青野原楽団

映画『バルトの楽園』で描かれたように、国内各所収容所で捕虜による楽団が編成されているが、同様に青野原俘虜収容所でも楽団が編成され音楽会が開催されていたことが、写真・プログラム等の資料から判明している。また、こうした資料により楽団が演奏した楽曲も判明している。

二〇一九年に下オーストリア州歴史資料館にて青野原俘虜収容所の資料展示を開催する計画が天津留厚先生に持ち込まれ、これを実現・支援するために天津留先生を座長に神戸大学、加西市、有志により「青野原オーストリア2019プロジェクト」が立ち上げられた。

この展示会のオープニング企画として、捕虜が収容所で演奏していた楽曲を復元演奏するため、関西で活躍する若手演奏が集まり「青野原楽団」が編成された。オーストリアへ出発前に、楽団のお披露目として市民交流センターで弦楽コンサート、壮行会として青野原町でピアノコンサートを開催した。

青野原楽団はメンバーの意向を受け、オーストリア展示以降も捕虜の音楽を伝える楽団として活動を継続し、毎年の青野原俘虜収容所跡地でのコンサート（ももこの11「富合地区ふるさと創造会議」・青野原俘虜収容所跡保存会主催）をはじめ市

内外で演奏を披露し、令和六年度は市民会館のホール事業として、ヴァイオリニストの横山令奈氏とコラボでコンサートに出演している。

青野原俘虜収容所跡 × 鷗野飛行場跡 × 青野原楽団

加西市を代表するもう一つの戦争遺跡として、第二次世界大戦時の鷗野飛行場跡がある。飛行場には姫路海軍航空隊が置かれ、海軍パイロットが養成された。大戦末期には神風特別攻撃隊「白鷺隊」が編成された。また、川西航空機姫路製作所鷗野工場が併設され「紫電」「紫電改」の組み立てと試験飛行が行われている。

第一次世界大戦と第二次世界大戦という二つの戦争遺跡があるという加西市の特徴を生かして、鷗野飛行場跡にある巨大防空壕の中で青野原楽団の演奏を行った。この巨大防空壕は、鷗野飛行場跡遺構群の一つで、当時は非常時の自力発電施設として置かれた長さ一四・五メートル、幅五メートル、高さ五mの施設内最大の防空壕である。現在は、その規模を活かし、特攻隊員の遺書を映像で紹介するシアターとして活用されている。

プロジェクトの主催事業として令和二年度から準備を進め、令和三年度に観客を入れてのコンサート開催を進めていたが、新型コロナウイルス蔓延と重なったため、観客を入れず、演奏収録と後日の動画配信という形に変更した。防空壕という総コ

ンクリートの特種な空間での演奏は、楽団メンバーの話では欧州の教会での演奏と似た響きになっているとのこと。

また、鷗野飛行場から飛び

立った特攻隊員の遺品の中に、ベートーヴェン交響組曲第6番

「田園」の楽譜が残っていたという史実に基づき、収録曲に鷗野飛行場の関連曲として「田園」を加えた。

こうした経緯もあり、令和四年度の加西市地域活性化拠点施設「SORAかわ」の開館記念式典での楽団演奏につながった。

青野原俘虜収容所 × 青野原楽団 × 水田家住宅

次は、戦争遺跡同士でない歴史文化遺産同士のかけ合わせとなる。

水田家住宅は、北条町横尾に位置する大正期の町家商家建築で、国登録文化財（平成二二年）となっている。主屋の土間と座敷をはじめ、離れの書院、中庭を挟み裏手に横長の土蔵を備える町家建築である。

主屋土間部を開放し北条来訪者の休憩所兼案内所として「横尾歴史街道 町かど亭」が開かれ、座敷では定期的に落語会等を開催されている。また、五部屋からなる土蔵のうち四部屋が



巨大防空壕での演奏動画



図 水田家住宅 1 階平面図 原図提供：加西市教育委員会



写真 土間での全体演奏 提供：青野原オーストリア 2019 プロジェクト

民具・商用資材・地域史等の展示室に改修されるなど、文化財所有者による積極的な活用が図られている。町かど亭では喫茶サービス等はあるものの、収益を見込んだものではない。水田家住宅が、令和四年度に建築一〇〇年を向かえることもあり、当該年度に一〇〇周年記念事業として、住宅の一般公開

と青野原楽団のコンサートを合わせた。公開効果を高める手段として、オーソドックスな町家コンサートに、水田家の特徴を活かした周遊要素を加えた。メインとなるのが、主屋土間を舞台に座敷を観客席にした、楽団の全体演奏を二回。全体演奏の合間に時間差で土蔵の各部屋で弦楽ソロの演奏を行った。

演奏を追っていくことで、主屋↓土蔵、土蔵↓主屋と文化財と家主の展示を味わえる周遊コースに仕上げた。

町家コンサート（音楽鑑賞）目的の来場者には、水田家（文化財）と青野原俘虜収容所の1を、それぞれの文化遺産好きには、もう片方の1と弦楽演奏鑑賞を体験する形となる。

また、補助金として利用した「地域文化財総合活用推進事業（文化庁）」に内部支出の禁止事項があるため、事業は青野原オーストリア2019プロジェクトの単独主催事業とし、プロジェクトが水田氏から会場となる住宅を有料で借り受けることで、水田氏の収入が発生する形とした。

なお、この企画については令和四年度四月に文化・観光・ス



写真 土蔵でのソロ演奏 提供：青野原オーストリア 2019 プロジェクト

ポーツ課へ異動したことにより、実施には直接関わっていないが、音楽への0→1も組み込む形となり、結果として所属業務面（芸術文化の振興）としても事業成果を期待するものとなった。埋蔵文化財出土遺物 × いけばな

前述のとおり令和四年度の異動により、芸術文化を担当することになった。主な担当事業としては、芸術文化の振興および加西市文化連盟関連事業、市民会館管理事業、播磨国風土記事業になる。

風土記事業については播磨国風土記一三〇〇年事業の継続事業で、「加西能」の開催、加西市こども狂言塾の運営、風土記講座の開催等である。

文化連盟事業の核となるのは、毎年十一月に開催される加西市文化祭である。文化連盟加入の美術家協会、芸能協会、音楽協会、文芸協会、いけばな協会、茶道協会、囲碁協会、こども劇場、それぞれの団体が事業を開催している。

令和四年度の文化祭終了後に、翌五年度開催に向け準備を進めていく中で企画したのがいけばなの花器に埋蔵文化財出土遺物（土器）を利用するというものである。いけばなというと、花瓶や花筒、底の浅い焼き物等の伝統的な物品を花器に用いるイメージが強いが、現在はオーソドックスな花器はもちろん、多種の素材が花器に用いられている。

そこで、加西市内の遺跡で出土した土器類を花器にして、いけばなができないかと考えた。埋蔵文化財出土遺物の取り扱いということではあったが、経験上は十分な保護策があれば問題はないと考えたが、担当課の説得材料と頻度・価値を計るため、先行事例をインターネットで検索すると、東日本で縄文土器を用いた事例が数件確認できたのみであった。「やっているが、事例が少ない」しかも「近隣事例が無い」という状況は、実施するにあたって、「障壁は突破されているが、まだブルーオーシャン」という、かなり適した状況といえた。

このまま、担当課へ持ち込んでも良かったが、役所は良くも悪くも「市民の要望」に応える形の方が動き（動かし）易いので、まずは加西市いけばな協会への打診から始めた。

別件で、いけばな協会副会長（当時・現会長）と話す機会があったので、土器を花器にいけばなをすることに興味があるかを確認すると、「興味がある、ぜひ挑戦してみたい」という答えが返ってきた。色よい回答を得られたため、生涯学習課へ企画を持ち込み事業の調整を始めた。

展示方法は、通常の展示に加え、市内七流派が一点ずつ土器を使った作品を出瓶し、使用した土器については生涯学習課が説明表示を加えることになった。

令和四年夏に加西市埋蔵文化財整理室にて、流派代表が集まり使用する土器の選定が始まった。花器選びに当たっては、文

我々が歩み寄る、距離を縮めようとしている以上に、市民との間にまだまだ距離が空いていることがこの発言から分かった。衝撃的な発言ではあったが、一方でこれが埋蔵文化財と市民との間で決定的に欠けている部分で、活用の糸口となることを秘



写真 土器のレクチャーを受けながらの花器選び

化財担当より事前
に用意した土器に
ついて説明を受け
選定に入った。

流派代表が土器
を手取る段にな
ると「土器なんて
一生触ることがな
いと思っていた」
という発言が出て
きた。元文化財担
当としては、市民
が埋蔵文化財を身
近に感じるような
活用、触れる機会
も持てるようにも
考えてきたつも
りではあったが、

めている発言ともいえた。

一月のいけばな展当日の展示は、作品周りがあまり煩くならないように、土器説明は簡易なカードプレートに留め、別に今回使用した土器と出土遺跡を解説したパネルを設置する形になった。

「水の張り方など工夫の必要があったが、いい経験になりました」と感想もいただき、関係者、来場者からも好評であった。この事業についても一〇月で異動となったため、仕上げてまで関わることはできなかつたが、令和六年度のいけばな展についても協会長からコラボの申し出があったため、生涯



写真 令和6年度のいけばな展 文化財担当職員によるギャラリートークが増える

学習課と文化スポーツ課へ会長の意向を伝えた。令和六年度開催は、前年度をグレードアップされた形で計画を進められている。

四 歴史文化遺産関係人口の創出

かけ合わせで重点を置いた0→1事業は、歴史文化遺産に関わる裾野（関係人口）を広げる策の一つである。アプローチをかけるターゲットを不特定多数とはせず、かけ合わせ先に存在する特定多数を狙い、対象層のベクトルに企画を揃えていくことで事業効果を期待した。また、かけ合わせ先（連携先）の団体とその所属員も、重要なターゲットである。事業を進めていく中で関係性を構築し、理解が深まることで相互に1が生まれる。

「加西市文化財保存活用地域計画」の保存・活用に関する基本方針2-1cで「歴史資料活用イベント等の企画・開催」が行政・団体が主として取り組む事業とされている。しかしながら、民間団体が本来とは少し毛色の違う事業に挑戦するのは、知識経験などの面でなかなか踏み出せないことがある。かけ合わせ事業に関わることで、企画自体は行政側立案の単発事業ではあったが、事業への参画経験が糧となり、関係者主催により新たな事業として立ち上がった事例もあったので、「事業モデル

の提示」としても効果があつたと考えている。

(一) 人×人×0≠0

かけ算ではゼロに何をかけてもゼロになるが、歴史文化遺産と何かを掛け合わせると、ゼロがイチになる可能性がある。この事業と事業をかけ合わせるといえるのは、言い換えれば歴史文化遺産や事業を担う人との人のかけ算といえる。事業を企画する段階で、全体の建付けを検討することは重要ではあるが、無関係であつた人と人をつないでいくことが重要で、これがつながれば事業は転がりだす。人こそが数式を超え0かけ算を1にする力といえる。

五 歴史文化遺産と観光資源の温度差

歴史文化遺産のかけ合わせ事業の最たる例が観光事業といえる。歴史文化遺産を他の観光素材や食・コース設定等、多彩なかけ合わせで観光誘客を仕掛ける。

加西市の歴史文化遺産と言えば玉丘古墳、法華山一乗寺、北条の五百羅漢、そして鵜野飛行場跡とsoraかやい。

令和四年度にオープンしたsoraかさいは、オープニング特需もあり一二万人の来場者があつた。しかし、加西市の観光を見ていくと、県立フラワーセンターの入場者数が最も多く

表 歴史文化遺産の観光入込数

施設名称	観光入込数	備考
玉丘史跡公園	20,955	国史跡
法華山一乗寺	40,896	国宝・日本遺産
北条の五百羅漢	9,016	県史跡
鵜野飛行場跡（soraかさい）	122,089	
小計	192,956	
兵庫県立フラワーセンター	234,300	

令和4年度

二万三千四百〇〇〇人である。この数は、主な歴史文化遺産の入込総数をも上回るという状況で、やはり観光サイドからみると、加西市の歴史文化遺産の価値は、フラワーセンターに遥かに及ばない。

もちろん歴史文化遺産に価値が無いというわけではなく、文化財サイドと観光サイドでの価値評価基準の差異である。

観光資源としての価値は、注目度、誘客、購買につながる雇用が創出できるなど、いかに経済効果に転嫁できるかが大きな基準になり、これに地域の活性化やシビックプライドの醸成、定住・移住の促進など内向きの副次効果が続いてくる。

一方、歴史文化遺産は、対象の古さ、背景、独自性、地域性などを加味した歴史的評価が絶対的な価値であり、文化財の指定・登録の基準でもある。整備についても、保存が第一義で、次に歴史的価値の周知、そして周知の効率化を図るための

利便性の向上と続く。整備の成果として観光目的に供する体裁も整ってはいくが、収益よりは来場者・利用者数が成果基準となっていることが多い。

しかし、観光での評価では、歴史的価値があるというのは付加価値の一つに過ぎない。よって、観光投資ということになると、観光拠点となり得る非歴史文化遺産も含めた他の施設と投資対象候補として競合することになる。たとえ歴史的価値があろうとも、観光活用が困難（パッケージングが難しい、収益が見込めない等）であれば、観光面からのサポートを受けにくい状態になり、収入を得る機会も必然的に減ってくる。

歴史文化遺産の置かれている状況は千差万別ではあるが、稼げる物件を中軸にした大きな傘を展開して、収益の一部が弱い物件にも回っていくようなシステムづくりというのが理想といえる。いうなれば「歴史文遺産経済圏」であり、この考え方が文化財保存活用地域計画における、ハードルは高いが保存活用区域の本来目指していくべき方向と考える。現在、地域計画の策定に関わる市町担当者、関係団体の方々には、資金の循環というのを含めて計画の中に盛り込んでいただければ、一歩踏み込んだ地域計画になるのではと考える。

どうしても面的な収益化が困難な場合は、点と点、人と人をつなぐ「かけ合わせ事業」で持続可能な歴史文化遺産の活用を検討いただければ幸いである。

最後に、今回紹介した事業は、著者自身がこれまで関わってきた人たちに支えられ成り立っている。突拍子のない話でも、面白いな、やってみようかと言ってくださった関係者各位に、この場を借りてお礼申し上げます。

註

- (1) 『Link』 Vol.8 「世界史の断片として——青野原俘虜収容所開設一〇〇周年事業——」(萩原康仁 二〇一六)
- (2) 横山令奈 ヴァイオリニスト 一九八七年箕面市出身 イタリア在住 二〇二〇年新型コロナウイルス下にイタリアクレモナ市の病院屋上でヴァイオリンを演奏。それらの模様は YouTube その他で配信され、世界中から賞賛を受ける。